



No. 62

2006年10月発行

新潟県支部報

県都に広がる渡り鳥の森 — 鳥屋野潟 —

マイスコープ

新潟市 岡田 成弘

80万都市県都新潟の中心部に位置する鳥屋野潟は、湖水面積179ha、県内最大級の潟湖です。秋冬季には3500羽に達するコハクチョウをはじめとするガン・カモ類や、ワシタカ類など多くの野鳥が飛来・越冬することで知られています。近年はサッカースタジアムや公園などが建設され、1年を通して鳥屋野潟を訪れる人が増えています。休日には親子連れなどでにぎわう県立鳥屋野潟公園にはひととき目立つ植樹の森があり、春秋に多くの渡り鳥が立ち寄ります。4月には桜が満開となり、花の蜜を吸ってエネルギーを補給するメジロの群れ、花弁を食べるニュウナイスズメ、花に集まる昆虫を飛びながら捕まえるオオルリやキビタキなど多くの小鳥たちが、渡りの途中で休息とエネルギー補給をしています。やわらかな緑が広がる5月の森には、ホイホイホイと鳴きながら長い尾をヒラヒラさせて樹幹を飛ぶサンコウチョウ、枝先でフライキャッチをくりかえすコサメビタキ、林床部ではアカハラなどのツグミ類が昆虫を探す姿などに会うことができます。



若葉の枝先のキクイタダキ

す。湖岸に広がるヨシ原で繁殖するオオヨシキリ、コヨシキリが囀るころ、カッコウが樹上でさかんに鳴き始め、盛夏の到来を告げます。秋には、再び小鳥たちが森に立ち寄りますが、春に比べ若鳥が多く、春の渡りとは違った出会いがあります。公園の森での観察の最大の魅力は小鳥たちを間近に観察できることです。繁殖地ではなかなか見つけないことのできない地味な羽色のメスや、県外で繁殖する鳥たちも間近で観察することができます。遠くまで出かけなくても多くの野鳥に出会うことができる鳥屋野潟公園、まずは是非探鳥会に参加してみてください。



桜の花とコムクドリ



春の鳥屋野潟公園

市街地の大大木で繁殖したチョウゲンボウ

上越市 後澤 正 知

《はじめに》

1995年から上越市の市街地、稲田一丁目の諏訪神社にある樹齢800年、幹回り6m、木の高さ25mのケヤキの大大木（神木、上越市文化財）でアオバズクの観察を続けている（図-1）。ところが、2006年にはアオバズクが毎年利用しているケヤキにチョウゲンボウが繁殖した。

このチョウゲンボウは、諏訪神社の西側120mの所を流れている関川に架かる、諏訪神社から北寄り250mにある稲田橋で営巣しようとしていた、つがいが移ってきたものと思われる。

2006年5月から7月にわたり、チョウゲンボウの抱卵からヒナの巣立ちまでを観察したので、その生態について紹介したい。

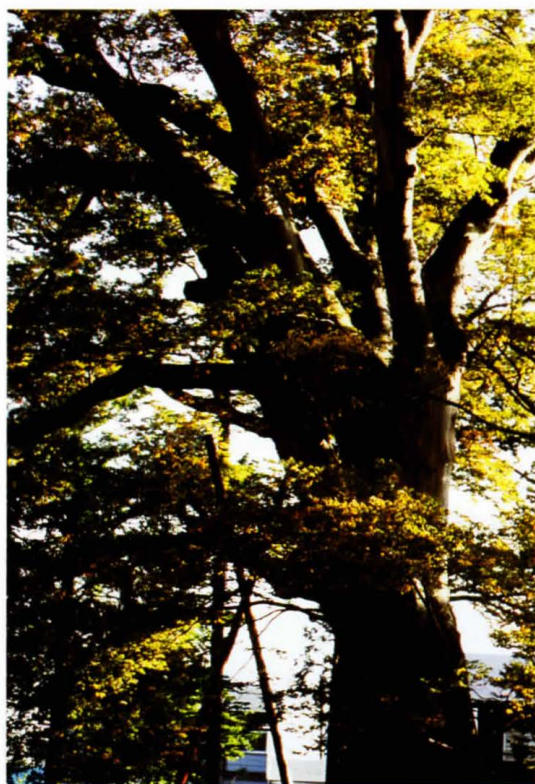


図-1 稲田小学校の構内から見るケヤキの大大木

《諏訪神社の環境》

境内に接して北側は稲田小学校の構内で、ケヤキの大大木から30mの場所には、境内に面する鉄筋コンクリート4階建て、高さ約17.5mの校舎がある。校舎は、この北側にもう1棟ある。校舎の屋上東寄りには、高さ約4mの塔屋が付随されていて、テレビアンテナが設置され、地面からアンテナの先までの高さは約24mである。チョウゲンボウは学校の建物を上手に活用している（図-2、3）。諏訪神社の東、西、南側は住宅地になっている。



図-2 営巣樹洞の下付近から見る校舎と塔屋

《営巣した樹洞の様子》

樹洞の位置はケヤキの15mほどの高さで、稲田小学校の校舎のある北の方向にのびた、直径40cmほどの太い横枝にある（図-4）。



図-3 関川右岸堤防の上から見る校舎と営巣木との位置関係、営巣木は右側のこんもりした森の一番高い木である。



図-4 地上15mの高さにある営巣樹洞、体を出しているのはヒナである。アオバズクもお気に入りの樹洞であった。

《抱卵、孵化》

5月9日、18時45分頃、諏訪神社でチョウゲンボウが営巣しているのを発見した。抱卵は5月11日か12日に始まった。孵化は6月9日か10日であり、抱卵を始めてから29日から31日目である。巣は樹洞の中にあるため、ヒナの数など中の様子はまったく見るができなかった。しかし、巣立ちをむかえてヒナは5羽であることが後でわかった。

抱卵は雌だけが行ない、雄はほとんど一日中塔屋のテレビアンテナの見張り場で過ごし、ときどき雌に餌を運んだ。雌は雄から餌をもらうわずかな時間だけ巣から離れ、このあいだ雄が一時的に抱卵した。

《食性》

チョウゲンボウは、齧歯類（ネズミ類）と鳥類を主な餌としている。抱卵が始まって10日目の5月21日-5時から18時の間、

雄が雌に餌を運ぶ回数と雌の行動を調べた。当日は、日の出4時35分、日の入り18時53分、天候は晴れ。1回目の餌は6時46分に運んで午前中に3回、午後は2回の合計5回である。最後の餌を運んだのは17時35分で、餌はすべて小鳥であった。

雌は、餌をほとんど一定の場所の校舎屋上の縁で受け取り（図-2校舎屋上の一番左より付近）、これを一定の場所で食べた（図-2塔屋の右側に付随した、平らな40cm平方の小さな屋根の上）。ここが雌のお気に入りの食事場である。雌がむしり取って池上に落ちた羽毛や尾羽を見ると、スズメ、ハクセキレイ、キセキレイ、カワラヒワとわかるものがあつた（図-5）。



図-5 むしり取られて地上に落ちて来たスズメ、ハクセキレイ、キセキレイの尾羽など

《雄の狩り》

狩り場は、諏訪神社から南側及び北側へ、それぞれ1,500m付近の場所である。そこは、地盤整備のための広い休耕田、点在する広い草地、短く刈り込まれた草地の学校グラウンド、病院の広場がある。雄は、送電線の鉄塔、ゴルフ練習場の鉄柱、建物などの高みに止まって地上を見張り、獲物を狙う（図-6）。

雄が家族のため、一日に何回餌を運んでいるのか、ヒナが孵化して8日目頃の6月17日、15日目頃の6月24日と22日目頃の7月1日に調べた。それぞれ11回、9回、9回であり、運んでくる餌は抱卵の時と同様、すべて小鳥であった（付表-1～3）。

雄は、このほかに自分で食べる餌も捕らなければならない。おそらく一日に5回前後は、

付表 1 雄親が雌親に渡した餌がヒナに給餌されるまでの状況

観察年月日：2006年6月17日 —— 孵化後8日目頃、ヒナの数5羽

観察時間：4時00分～18時30分；天候：曇り・8時00分頃まで濃霧

雄親が雌親に 餌を運んだ回数		雌親が貯蔵した餌の状況	雌親がヒナに 給餌した回数	
			1回目	4:45
			2回目	6:45
			3回目	7:49
1回目	8:35	◎翌日以降に繰り越し	4回目	10:58
2回目	10:07	◎当日消費した	5回目	13:10
3回目	10:56		6回目	14:25
4回目	11:10	◎翌日以降に繰り越し	7回目	14:29
5回目	11:45	◎当日消費した	8回目	16:58
6回目	12:17	◎当日消費した	9回目	17:37
7回目	13:12	◎翌日以降に繰り越し	10回目	18:07
8回目	14:29		11回目	18:10
9回目	16:57			
10回目	17:35			
11回目	18:10			

- 備考 1. 日の出 4時27分；日の入り 19時09分
2. 実線は雌親、破線は雄親の行動を示します。
3. 雄親が運んできた8回目と11回目の餌は、この時雌親がヒナに給餌のため巣穴に入っていたので、雄親が直接巣穴の入口に餌を置いたもの。
4. 雌親が貯蔵した餌の小鳥6羽のうち、翌日以降に繰り越した分が3羽、当日のうちに消費した分が3羽でした。
5. 雌親が貯蔵した餌の◎印は、雌親が一度巣穴の中に餌を運び込んだ後に、巣穴の外に運び出したものを示します。
6. 雄親が餌を運んだ時間と雌親がヒナに給餌した時間にずれのあるところは、雌親が小鳥の羽毛をむしり取るために要した時間のずれです。

付表 2 雄親が雌親に渡した餌がヒナに給餌されるまでの状況

観察年月日：2006年6月24日 —— 孵化後15日目頃、ヒナの数5羽

観察時間：4時00分～18時45分；天候：曇り

雄親が雌親に 餌を運んだ回数		雌親が貯蔵した餌の状況	雌親がヒナに 給餌した回数	
			1回目	4:23
			2回目	4:34
1回目	7:00	—————→	3回目	7:03
2回目	8:05	—————→	4回目	8:08
3回目	11:14	—————→	5回目	11:16
4回目	11:16	-----→	6回目	11:16
5回目	13:47	—————→	7回目	13:47
6回目	14:25	—————→	8回目	14:27
7回目	14:41	—————→	9回目	14:41
8回目	17:10	—————→	10回目	14:59
9回目	17:37	—————→	11回目	16:01
		—————→	12回目	17:10
		—————→	13回目	17:40

備考 1. 日の出 4時28分；日の入り 19時11分

2. 実線は雌親、破線は雄親の行動を示します。

3. 雄親が運んできた4回目の餌は、この時雌親がヒナに給餌のため巣穴に入っていたので、雄親が直接巣穴の入口に餌を置いたもの。

4. 雄親が餌を運んだ時間と雌親がヒナに給餌した時間にずれのあるところは、雌親が小鳥の羽毛をむしり取るために要した時間のずれです。

付表3 雄親が雌親に渡した餌がヒナに給餌されるまでの状況

観察年月日 2006年7月1日 — 孵化後22日目頃、ヒナの数5羽

観察時間 4時00分～18時00分

天 候 1. 7時00分頃まで小雨、後曇り

2. 13時00分頃から観察終了まで、強い西風が吹き続ける。

雄親が雌親に 餌を運んだ回数		雌親が貯蔵した餌の状況	雌親がヒナに 給餌した回数	
1回目	6:38	→ ◎ 校舎屋上に貯蔵したので消費の状況不明		
2回目	7:05	→	1回目	7:07
3回目	8:20	→ ◎ 校舎屋上に貯蔵したので消費の状況不明	2回目	7:40 { 貯蔵してあった餌
4回目	11:56	→	3回目	9:30 { 雌親が自分で捕った獲物
5回目	12:28	→	4回目	11:56
6回目	13:33	→	5回目	12:31
7回目	16:36	→	6回目	13:33
8回目	16:50	→	7回目	16:38
9回目	17:44	→	8回目	16:52
		→	9回目	17:47

備考 1. 日の出 4時30分；日の入り 19時11分

2. 実線は雌親の行動を示します。

3. 雄親が餌を運んだ時間と雌親がヒナに給餌した時間にずれのあるところは、雌親が小鳥の羽毛をむしり取るために要した時間のずれです。

4. 雌親が貯蔵した餌の◎印は、雌親が一度巣穴の中に餌を運び込んだ後に、巣穴の外に運び出したものを示します。



図-6 雄の狩り場の一例 手前が広い草地、ゴルフ練習場の鉄柱の高みに止まって周辺の獲物を狙う。

自分の餌を捕っているものと思われる（関連 - 《食性》の項）。雄はヒナが孵化してから一日に15羽前後の小鳥を捕っていることになる。

《餌を貯蔵する親》

チョウゲンボウは、雌も雄も餌を貯蔵する習性がある。ヒナへの給餌は雌だけが行なう。雌がヒナに一日に何回給餌しているのか。また、雌が餌を貯蔵する行動と貯蔵した餌を消費する状況を6月17日、6月24日、7月1日の3回調べた（付表-1～3）。

雌が餌を貯蔵する場合は、ヒナが満腹で餌を与える必要がない場合とヒナが満腹して餌を残した場合がある。これらの餌はヒナが空腹の時、餌が足りない時に食べさせる。

調べた日の天候は、濃霧の日、曇りの日、強風の日とそれぞれ特徴があって、餌の貯蔵と消費の状況に違いが見られた。チョウゲンボウは普通5から6羽のヒナを育てる。雌が餌を貯蔵する習性は多くのヒナを育てるための知恵と思われる。

貯蔵する場所は、塔屋の南側に2箇所あるサッシの窓枠の隅、塔屋の南側左右の足元、校舎の屋上、塔屋に付随した平らな小さな屋根の上などが利用された（図-2,7）。

《ヒナの巣立ち》

7月9日巣立ちの日をむかえた。巣立ちヒナが孵化して30日か31日目である。当日は朝から雨が強まったり、弱まったりの一



図-7 塔屋のサッシ窓枠の下方両隅に貯蔵された餌、左側がハクセキレイ、右側がスズメである。

日であった。日の出は4時35分、日の入りは19時10分。

4時45分に1羽目、4時58分に2羽目、7時35分に3羽目、18時22分に4羽目が巣立ちをした。巣立ちの際、ヒナは樹洞の穴の縁から樹洞の枝を上へ登って行く。5羽目のヒナは7月11日に巣立ちをした。ヒナ達は巣立ちをしても樹洞の周辺にとどまり、はばたいて飛翔力をつけながら、7月13日までには飛び立って行った（図-8）。



図-8 樹洞の周辺にとどまり、はばたいて飛翔力をつけているヒナ

《付記》

2006年4月29日、諏訪神社でアオバズクの初鳴きがある。このあと、つがい誕生したが5月13日には他所へ移って行く。大ケヤキには樹洞はいくつもあるのにチョウゲンボウと共生はできなかった。

参考文献

日本のワシタカ類（1995）文一総合出版

「8月上越地区探鳥会でヤマショウビンを見た」

新潟市 佐藤 吟 一

2006年8月27日の上越地区探鳥会に参加して、ヤマショウビンを見ることができたので報告します。

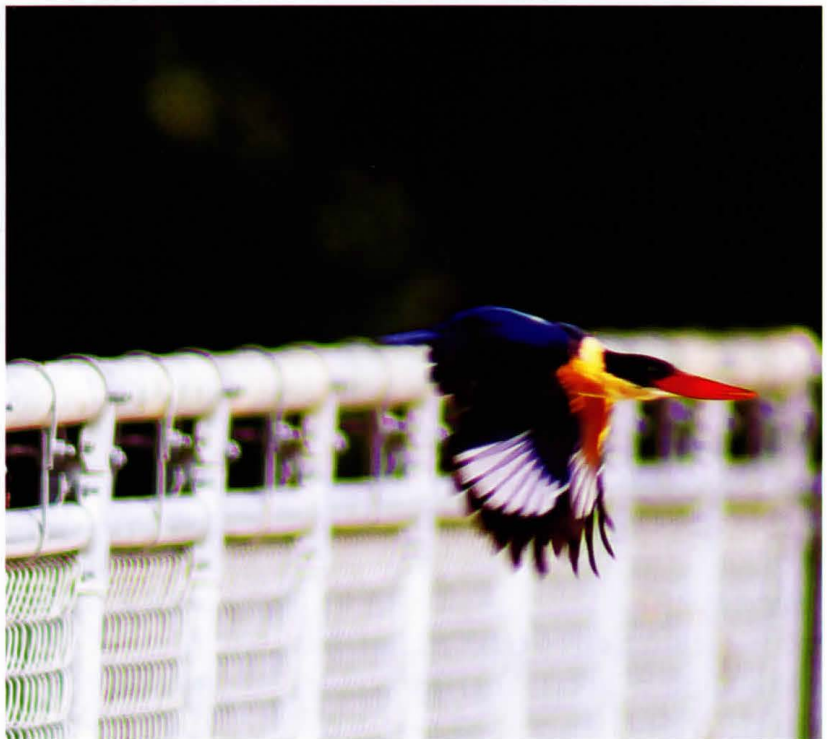
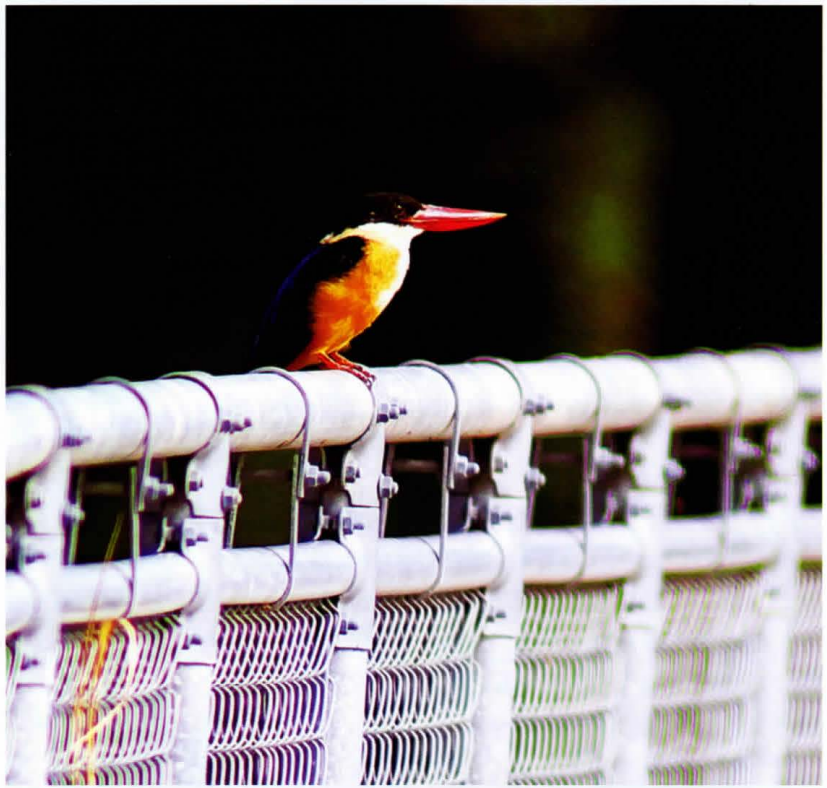
上越地区でヤマショウビンが見られたのは、96年9月に青海の田海ヶ池で見られた時以来だそうです。

私にとっては、十数年前に自宅近くの休耕した山田の上を走る電線にとまっているのを見たことが有り、その時以来で2度目となります。

ヤマショウビンは全国的にみても珍鳥と言っていると思います、県内でも出現回数は片手で足りる位ではないでしょうか。

8月の上越地区探鳥会は探鳥の後、研究発表会もあるので参加してみようと思い、上越の知人に、鳥の様子を尋ねてみると、24日にヤマショウビンが出たと聞き、もしかしてまだいるかもと思いました。

農業用水池に出たと聞き、上越市にはとても多くの池があるので、詳しく場所を聞いて当



日はまだ暗いうちに現地に着きました。

6:00 過ぎ、知人も到着して出現を待ちました。

聞くと、前日も朝と夕方に出たとのこと、朝は6:30 頃現れたとのことでした。その日も6:30 少し前に姿を見せ、杉の枯れ枝にとまり、羽づくろいをしました。

この用水池は一辺が50 mほどの4角形で、その半分が杉と広葉樹の林に接しています。ヤマショウビンは主にこの林内にいて、時々フェンスや高い杉の枯れ枝にとまりました。

私以外の人たちは探鳥会の集合場所へ向か

いましたが、私は行かず、ポンプ小屋の日陰で見ていることにしました。

1時間ほどしてヤマショウビンが30 mほど先のフェンスに現れました。

私はヤマショウビンに気づかれないように、ほふく前進で車内に戻り、カメラを取り出し車窓から撮影しました。

そのうちに探鳥会の参加者も車を降りこちらに歩いてきました。携帯でヤマショウビンが出てると連絡して、遠回りして池に近づいてもらいました、池に到着して皆でヤマショウビンを見ることができました。

中部ブロック会議に参加して

10月8日(日)~9日(月)、第14回日本野鳥の会中部ブロック会議が、愛知県津島市の愛知県津島勤労福祉会館アイブラザ津島にて開催されました。新潟県支部からは大島支部長、伊藤指導部長、本間事務局次長の3名が参加しました。

8日は朝5時前に新潟を出発し、会議に間に合うようにと、名古屋に向けて高速道を走り、昼前には会場に到着する事ができました。会議には中部ブロック21支部中17支部から45名と本部から鈴木専務理事以下4名の参加で行なわれました。愛知県支部長、本部専務理事、愛知県自然環境課長のあいさつの後、議会に入りました。まず中部ブロック、細則の再採択の件で、理事、評議員の選出要領を改正する事に関して愛知県支部長より経緯の説明があり、過半数の賛成で採択されました。次に風力発電について本部の古南自然保護室長より現状と対策について話があり、福井県支部、石川県支部、三重県支部からも現状報告があり、長野県支部からは菅平風力発電反対の署名要請がありました。

会議の後半は、講演として愛知県支部副支部長の加藤倫教氏より「チュウヒの生息地—不曾岬干拓地」と、鳥類骨格研究家の小木

曾チエ氏より「ハネ・ホネからみえる鳥の生態」のお話がありました。

夕食後、別室にて懇親会があり、越の寒梅と八海山を差し入れ、各支部の人達に喜ばれました。また、伊藤指導部長は獣医でもあり、小木曾氏とすっかり話が合い楽しいひとときを過ごしました。翌日は早朝探鳥会で、前日講演のあった木曾岬干拓地へ案内していただき、朝食後は、名古屋市のごみ埋め立て計画撤回で守られたラムサール条約登録湿地、藤前干潟と活動センターへ。センターでは豊栄出身の方がおられ、「新潟からおいでですか。なつかしい。」と声をかけられました。その後、名古屋市の野鳥観察館・稲永ビジターセンターを見学し、庄内川河口では、カワウが「島」のようにたくさん集まっていたり、消波ブロックにミサゴが7羽も羽を休めていました。シギ、チドリ類もたくさん見る事ができました。

北アルプスが雪化粧している姿を見ながら、帰路につきました。

事務局 本間由紀子

銀山平探鳥会に参加して

魚沼市 桑原 和 寿

トンネルを越えるとそこはまだ雪国だった。奥只見シルバーラインの長く暗いトンネルを右折すると、一転してまぶしい銀世界に木々の新緑。除雪していない所にはまだ1mを超える積雪があり、自宅から20km程度の距離とは思えない季節のギャップに圧倒されながら会場へ到着しました。

翌朝は心配された霧の発生もなく、駒ヶ岳、中ノ岳、荒沢岳がくっきり見える晴天のベストコンディションでの探鳥会となりました。ただ残雪が多いこともあって寒い。何と水たまりには薄氷が張っていました。

出発前に宿の周りではニュウナイズズメとキセキレイ、むこうの尾根の枝先には小さいながらキビタキとオオルリをじっくり観察す



ることが出来ました。

氷河のような景色の大雪原へ。芽吹き始めたまばゆい新緑と雪のコントラストの中でノジコとキセキレイをたくさん観察し、ブナの林では近距離でさえずるキビタキの黄色を皆さんで堪能することができました。

おまけに荒沢岳を登るカモシカを見て、その後にはまだきれいな幼いカモシカの死体を発見し、体の特徴などを勉強することが出来ました。

途中で魚沼市探鳥会グループに出会い、リーダーの柳瀬先生からはワシタカ観察のアドバイスをいただきました。

朝食と鳥合わせの後はワシタカの観察会。雪原の見晴らしのよい場所で晴れて出現の期待が高まる尾根を1時間半ほど眺めた結果、最初にクマタカを、続いてとノスリ2羽を観察。期待のイヌワシは姿を現しませんでした。

でも、朝食後の休憩時間に大島支部長や本間事務局次長など数名の皆さんが温泉の露天風呂からイヌワシを見られたそうです。

天候に恵まれ、季節はずれの残雪と新緑の光景がとても印象的な探鳥会でした。

次は双眼鏡でなくタオルを持ってワシタカを見に来ようと思います。



佐 潟 と

新潟市 佐藤 安男

砂丘湖として佐潟が形成されて千数百年、そしてラムサール条約の登録湿地となりちょうど10年。この悠久の時を野鳥たちは季節に応じ世代を代えて棲み続けています。

実はそこには常に人の関わりがありました。

地元の方々による魚や貝、蓮根や菱の実などの自然の恵みの収穫、下流域水田の水瓶としての利用や潟内での稲作。また、その潟内たんぼに肥料として潟底のドロ(植物腐食体)を揚げる個々の作業、村人みなで「潟普請」と云われた佐潟を維持管理する活動など昭和30年代以降の高度成長を迎えるまでは、まさに手垢のつくほどの関わりがありました。同時に多様な環境が維持されることとなり、野鳥のほか多様な生物が棲む豊かな自然環境が成立していました。まさに自然と人との共生の現場であったのでしょう。時代は流れ佐潟公園となりラムサール条約にも登録されその価値が謳われ新潟市民の財産とし認知されるようになりました。とはいえ水質悪化傾向、湖底環境、自然遷移、周辺砂丘畑との関係など佐潟保全の課題を抱えています。現在、新潟市による保全計画の策定、さらに今年見直しの保全計画がスタートしました。その新保全策には地元の知恵を活かしていこうとする

考え方が盛り込まれています。また、最近地元赤塚の新しい世代の人達が直接関わり始めました。行政に依るだけではない、野鳥の会などNGOや市民との協働は、新たな時代を迎えた佐潟をきっと支えるものと思います。けっして昔には戻らない未来に向けて「温故知新」という言葉が脳裏にふっと浮かびます。佐潟にある職場に恵まれ、野鳥を通じ世界につながり、古老を通じ歴史の深みを、そしてたくさんの人達に支えられ野鳥以上に豊かさを感じています。

8年前は鳥のとの字も知らなかった山男がいったいのバードウォッチャーのごとく双眼鏡を首にかけウロウロしています。今、周辺



着水するコハクチョウ



潟舟にのる子供たち

は落ち葉がカサコソ、葦の向こうの水面には蓮の枯れ色が目立ちます。その下に保護色のコガモ、チュウサギは菱の上で餌を探しています。野鳥の夏と冬が同居してとてもにぎやかですが、秋空と佐潟はさわやかで静かです。昨年改築された野鳥観察舎「潟見鳥」からは佐潟の展望が広がります。初飛来後増えてきた白鳥、例年11月末には安心できる時として3000羽もの白鳥が飛来、冬の間を過ごします。毎朝夕の壮観な飛び立ちと時入りが楽しみです。



オオバンの親子

支部役員退任の挨拶

上越市 山本 明

私は今年3月末をもって支部役員（副支部長兼保護部長）を退任しました。1978年に当支部が発足した時に、初代支部長加藤忠一氏の推薦で副支部長になって以来、27年にわたる長い期間でした。私も喜寿を過ぎて行動力も低下してきましたので、何時までも役員の座に居座ってはいは迷惑をかけると思い、後は若い方々に託して退任した次第です。

当初の頃副支部長といっても、名目上支部長を補佐する以外これと言った担当もなく、単に名前だけのお飾り役員では私の意に沿わないので、1984年頃保護部の設置を総会に提案し承認されて以来、主に支部内で保護活動を担当してきました。自他共に日本最大の保護団体と認める日本野鳥の会の支部で、保護活動をしないというのでは申し訳が立たないとの思いからでした。

初めの頃は何をすべきか、県内の情勢も分からず暗中模索でした。そのうち県内の情勢が分かってくると、取り組むべき問題は多くありましたが、部員3人では限界もあり出来る範囲での活動となりました。これまで保護部として取り組んできたことは、その後で大体支部報に載せてきました。中には上越市富岡のアオサギコロニーの保全問題（1990上越市長へ要望書提出）、奥只見の電源開発に伴うイヌワシ保護の問題（1993～97、シンポジウム2回と県および業者の説明会に参加、環境影響評価準備書への意見書提出）などは載せないでしまいました。

保護活動はしんどい面がありますが、こちらが動けば行政も業者も動く（対応する）ことは確かで、何もしなければ何も生じません。役員の方は（保護部以外の方も）大変でしょうけど、常に400人近い会員のことを考え、創意工夫で活動のマンネリ化を防ぎ、緊張感を持って支部運営に当たって欲しいところです。

発行 2006年10月31日 No.62

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒950-0941 新潟市女池3丁目13番25号

T E L 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002